

時間が、過去～現在～未来へと進んで行くことを、疑う人はいないでしょう。その一方で、時計の針は、今日も、今この瞬間もくるくると同じ軌道上を回り続けています。たった今刻まれて過ぎ去ってしまった7時31分は、明日もまた同じようにめぐってくるだろうこともまた事実であり……

でも、これとは違う「時間」の感覚がある気もするのです——少なくとも、私が暮らした中国・陝北農村の人々には。今月は、4つの「循環」をテーマに、この地域の人々の「時間」感覚について考えていきましょう。



季節の循環——「農民の時間」

私はまだ学生でしたが、日本がバブル景気に沸いていた時代、「世の中はよくなる一方だと思っていた」という回想が、よく聞かれます。この話はおそらく、「でもこれからは逆に下降—辺倒になるのではないか」という不安と表裏一体な気がするのですが、皆さんはどう思われるでしょうか？

いずれにしても、このような感覚は、私たちが通常思い描く「時間」、つまり“単線的”に一方向に進む時間の感覚をなぞるものだと言えるかも——そんなふうに思い始めたのは、先日見た、南仏の農村生活を描いた映画「モダン・ライフ」がきっかけでした。農民たちの日常を淡々と映し出した、この静かな映画に流れていたのは、まぎれもなく“循環的”な時間でした。そして、この「時間」の感覚は、私が暮らした中国・陝北農村のそれによく似ているように思われました。

映画のパンフレットに寄せられた文章のなかで、ある評論家の方が、季節とともに繰り返される伝統的な農村暮らしに根ざしたこの時間を、「農民の時間」と呼んでいました。たしかに、「時間」が断片状に切り刻まれた都会の労働者の時間とは異なりそうだ、ということには賛成です。でも、この見方に少しの違和感を覚えた自分がいたのも事実。なぜかといえば、たぶん、私が感じている「農民の時間」は、とても未来志向だから。もう少し説明すると、彼らがいつも見ているのは、「過去に根ざした未来」であって、単なる繰り返しではないのです。

昨年の初秋、寄宿先のサンワー村を突風が襲ったことがありました。ほんの数時間吹き荒れただけでしたが、不意打ちの暴風の被害は甚大で、あとは赤く熟すのを待つばかりに大きな実をつけた棗の木は、枝ごとものがれて飛ばされ、収穫予定量の5分の1は地面に叩きつけられました。無残に落ちた青い実をひとつひとつ拾い集める村の人々。「一番高く売れる大きな実が落ちた」と人知れず涙を浮かべる長老を手伝いながら、私は言葉を失いました。

翌朝、農家の人々は落ちた実を一齐に各家の中庭に広げはじめました。秋の雨季に入る前のこの時期の天候と陽光の強さを長年の経験からはじき出し、落ちた実を赤く熟させるためにどれくらい陽にあてるべきかを見定めます。ものによっては、貯蔵庫を火で熱してドライフルーツにする作業も並行して行われました。こうして、価値は落ちたとしても少しでも換金できるものに変えることで、被害を最小限に食い止める努力が払われます。農民たちのこの“即興力”は言うまでもなく、日々、年々の変化の観察からみ得られる、彼らの宝物です。

農曆こそは、このような過去のデータの蓄積そのもの。農曆(旧暦)の10月を過ぎると、陝北農村ではあちこちの大地の穴から、煙が出始めます。この穴はその地面の真下に掘られたヤオトン住宅の煙突の穴で、ここからもくもくと立ちのぼる白い煙の筋は、家の中のかまどに火がくべられる冬の到来を知らせます。(夏は中庭のかまどで調理が行われます。)[十月初一(旧暦の十月一日)以降、かならず寒くなる。この日を過ぎないと、煙は上にのぼっていかず、家の中にもってしまふんだ]そう地元の人がいうのを聞いて初めはちょっと疑った私でしたが、少なくともこの3年間は、そのことば通りになっています。同じく、立春の時期にはきまって暖かな風が吹き出して、歩いて渡れるくらい厚く張った河の氷は融けだし、再び河のせせらぎが響きはじめます。この日には風の神様にご挨拶する儀礼がおこなわれ、それを合図に作物の種を風に飛ばして畑に播く作業が始まり、また新たな農業の一年がスタートするのです。

陝北の人々の日常生活は、学校や企業を除いて、いまでも農曆がスタンダード。(誕生日も、当然、旧暦で祝います。)この地に暮らしていると、他のカレンダーなど考えられないほどに、季節それ自体がこの暦にぴったり寄り添いながら移ろいゆくのを体感し、本当に不思議な気持ちになります。この暦によって設計された暮らしの型こそが、来年の今の自らと作物のあり様を、確実に照らし出してくれるのです。



魂の循環——生と死の繰り返し

「十月初一」といえば、数年前のこの日の夜、北京の大きな交差点脇で、無数の小さな火がぼうっと燃え上がっては消える、幻想的な光景に出くわしたのを思い出します。近づいてみれば、人々が道端にしゃがみこんでチョークでアスファルトに円を描き、その中に弔いたい死者の名を書いて、紙製の服や紙銭を燃やしています。「寒衣」と呼ばれるこの紙製の服は、「鬼」(祖霊や地霊)になったご先祖様に差し入れる冬衣。北京のような大都会では、

お墓参りにいけない人々がこのように即席の陣地を決めて、あの世の故人に「送寒衣」するようですが、陝北ではこの日、かならず土盛りのお墓に寒衣をお供えに行くのが習わしです。

陝北・延川県の剪紙名人、馬瑞蘭さんは毎年「十月初一」の前日と当日、街の橋の上に自作の寒衣を並べて即席のお店を開きます。馬ばあさんの寒衣は、男女用があるだけではなく、下着からチョッキまでセットになっています。上着は表地と裏地に別々の色の紙をつかった上に、金ボタン付きという凝り様！枕も敷・掛布団もあって、小さな剪紙で飾られています。金色に輝く靴もまた、煙草の箱の厚紙をつかって立体に作るという、手の込んだ作りです。

「あつと言う間に燃やしてしまうのに、なんでこんなに丁寧に作るの？」とたずねる私に、馬ばあさんは言います。「私たちが着たり使うものを彼らにもあげないとね。“鬼”だって、下着や布団がないと寒いだろ。きれいな飾りがついていこうがうれしいだろ。」今年の「十月初一」にも、馬さんが丹精込めて作った寒衣はたくさんの墓前に運ばれて、燃やされました。それはこの世で消えたとたんにあの世に届き、きっと冷たい大地に凍えるご先祖様たちを温めていることでしょう。

寒衣が豪華服を模したものであれば、丁寧にドーム型の穴を掘ってつくられる陝北のお墓は、まるでヤオトンのミニチュア版。埋葬時には、土そのままの床がきれいに掃き清められて、ご遺体の傍らに蠟燭を灯したまま、分厚い石のドアが閉められます。こんなふうには、あの世でもこの世と同じような、いやそれよりもよい暮らしを送れるようにと、ご先祖様が葬られて大切に祀られるのをみるにつけ、この土地の人々の魂は、ずっともう一つの世界で生き続けると考えられているのだろうか、感じ入らずにはいられません。

ところが、お年寄りたちの語りには、「生まれ変わり」



馬さん作の女性用の寒衣。右の白い丸首の衣は下着。

の話がよく聞かれるのです。どれくらいの期間で生まれ変わるのかはケースバイケースのようですが、ときにはものすごく短い周期で生まれ変わったというような話もあって驚きます。たとえば、高ばあさんが聞かせてくれた、その昔、病気のお母さんがうわ言で語り出したという前世の話。

高さんのお母さんは前世、山西省の村で男の子の兄弟を生き育てる最中に、若くして亡くなったものの、今も兄弟仲の悪い息子たちが気がかりで、仲直りを諭したい、と切望している……彼女は村の名前や様子も、息子たちの名前も鮮明に語ったそうで、お母さんの高熱がひかず困った家族は、手を尽くして前世の息子たち（すでに高齢になっていたようですが）を探し出して事の次第を説明し、村に連れてきたのだとか。兄弟を見るなり、お母さんは前世の魂となって彼らに語り出し……思いのたけを語り終ると高熱も下がり、元気になったといいます。真偽のほどはともかく、その場ではさも信じられないと笑って話を聞きながしているおじさん達もまた、後日「じつは、うちの父さんも…」とこそそ語り出すのを聞くと、前世話がけっこうポピュラーであることが実感されます。

陝北では、「招魂」という厄除けや病送りの儀礼も日常的に目にします。西洋医学の病院にいて治らなかった病氣、ちょっと具合が悪いときなどは、家族が切り紙や小麦粉を練ってつくった人形を燃やししながら、手箒を振り振り、病人から出て行ってしまった魂を呼び戻します。特に子供たちの魂が出て行ってしまわないようにするのは母親の大切な仕事です。

陝北ではこんなふうには、人の魂が時間と空間、大地の上と下を自由に行き来しながら循環しているかのようです。現世の人も大地に穴を掘った家に暮らすこの地の人々にとって、それは経験的にとても自然なことなのかもしれません。私が研究する剪紙もまた、神々や物語の世界と人々がとても近い場所で生み出される手仕事だと言えます。

私たちの日本のご先祖様もまた、似たような世界観をもっていたらうことは、各地に残るさまざまな風習から見ても確かでしょう。ビルが立ち並ぶ私が住まう現代の“現世”からは、あの世へ旅立つことはひどく遠くに行くことのように感じるのですが、実はそんな見方自体が、長い歴史をさかのぼれば、むしろ特別な見方なのかもしれません。

✂ 世代の循環——老いの心づもり

お棺・死に装束・遺影——この3点セットは、子供たちが親のためにそろえる必須アイテム。亡くなってから準備するのでは間に合わないため、親が60歳を超えたら（最近はまだ少し遅くなってきてはいますが）、息子・娘たちはタイミングをみてこれらの用意に取り掛かります。お棺職人を家に呼び寄せて、立派なお棺を作ってもらうのは、

まさに一家の大事業。木彫りの華麗な装飾をはりめぐらしたお棺は、廃墟となったヤオトンなどに、来たる日まで大切に保管されます。

ご遺体が着る衣装や枕は、「寿衣」や「寿靴」、「寿枕」と呼ばれ、老いてから逝くことができるのを祝うかのよう
に、赤色系の絹布で作られたものをよく目にします。今は既製品を使うことが多いですが、農村では、母のために娘が一針一針と見事な刺繍をほどこした寿衣が、箆笥の中に大切に収められている光景に、今でも時々お目にかかります。以前見せてもらった毛さんお手製の「寿枕」は、この世から蓮の花咲くあの世へ続く階段を登るお母さんと、その足元を照らす何本もの蝋燭が刺繍された、心温まる美しい図案で飾られていました。

村の人にカメラマンだと勘違いされている私が、時折頼まれるお願い、それは、遺影の撮影です。通常は、遠い街の写真館まで、まだ歩けるうちに撮りに行くのですが、初めての本格的な撮影に緊張するため、顔がこぼれてしまい、どうにも自分らしくない——そんなお年寄りたちにとって、

住み慣れたヤオトンで撮影するわたしの即席写真館は、いつも通りの顔を写してくれると、なかなか好評でした。

驚いたのは、その「遺影」をご本人たちがすぐに壁に掛けてしまうということ。ご自分の肖像写真として飾られるのですが、亡くなった後もそこにあり続けて後を生きる家族を見守る写真だと考えると、撮った身としてはちょっと複雑な気分です。そんな私を尻目に、「もう準備はできた。すべては息子たちにまかせてある。」と喜んで話しながら、台所で今日も食事の準備に勤むおばあさん達を見ると、こちらもなんだか嬉しくなってしまう。

陝北のお葬式で、参列者はふつうは白い衣を着るのですが、ひ孫世代より下の世代の子供たちには、めでたい色である真っ赤な服を着せる風習があります。ここにも、世代が循環していくことへ切ないほどの願いを感ずいます。彼らの老いの心づもりに、なんとも晴々としたものを感じるのは、きっと私だけではないでしょう。



自分のなかの循環——同じようで違う剪紙

ここまで、一年という季節の循環、人々の世代間の循環、さらに大きな魂の循環をみてきました。最後に、日々の暮らしの循環、それも自分自身の中にもちょっとした循環が

あることをみて、お話を終えたいと思います。

前回（‘わんりい’ 10月号）の文章でも書いた剪紙には、たくさんのモチーフが描かれますが、それらは土地の人々が共通にもっている世界観や暮らしのあり様を描いたもの、つまり同じ源泉から生み出されたものがほとんどです。

そんなわけで、同じ題材の似たような構図のもの、たとえば同じ作り手が、十八番である同じ「ねずみの嫁入り」の場面を、生涯のうち、何百回も切ることにはよくある話です。ただし、彼女たちはそのひとつひとつの剪紙を比べ、きまって「同じようで全然違う」と表現します。これは単なる売り文句というよりも、むしろ同じ絵柄を繰り返し切り出すごとに、アレンジが加えられて変わっていく、その過程を楽しむからに他なりません。他の人には同じように見えても、自分にとってはささいな、でも小さくはない変化が、その繰り返しの中にはあるのだと思います。陝北の剪紙の切り手に限らず、現代日本の都市に暮らす私たちもまた、日々、小さな時間の循環を重ねる中で、同じだけ違う自分

を生活しているのかもしれない。

陝北農村の人々から習い得た、大小さまざまな循環の輪は、いつも同じ軌道を描く輪ではなくて、いうなればコイルのような螺旋——それは両隣とまったく同じではなくちょっといびつな形かも——を描きながら、未来へと向けて進みゆくものでした。私のまわりの日本のお年寄りや、農家の人々にとっては、陝北の人々の循環する「時間」感覚は、むしろ近しく感じられるかもしれません。他方、確かな来年も見えず、抛り所なく時を過ごしている私自身にとっては、「循環する」時間をもつことそれ自体に、明日を生きるためのヒントがあるように思われるのです。

◆丹羽朋子（にわともこ）

東京大学大学院文化人類学研究室、博士課程在籍。中国・陝北地域の民間芸術研究の傍ら、日中の出版界をつなぐプロジェクト「一芯社図書工作室」のメンバーとして書籍や展覧会の企画に邁進中。

一芯社ウェブサイト (<http://yixinshe-books.jimdo.com/>) から、本エッセーのバックナンバーもダウンロード可能になりました。